

歴史館だより

題字 最上家第47代当主 最上公義氏



長谷堂城大手門の再現(特別展 東北の関ヶ原・慶長出羽合戦より)

慶長出羽合戦400年記念号

- ◆ 最上氏研究前進のために(一)
- ◆ 特集 慶長出羽合戦400年
- ◆ 「羽源記」に見る天文現象について

No.8

2001年3月発行

財団法人最上義光歴史館

最上氏研究前進のために(一)



栗野 俊之

一節が中心となることは明らかであり、その執筆者は一部を除き菅田慶恩氏である。

最上氏に関する基本的な文献とされてきたものに、まず菅田慶恩著、日本の武将60『奥羽の驍将―最上義光―』(人物往来社、一九六七年六月)がある。内容についてはのちに述べるが、この書名は「最上義光」という名前よりも「奥羽の驍将」という題名のほうが大きく目立っている。この本の題名は編集サイドの意向によるものと思われるが、最上義光という戦国武将の名前がまだ一般的ではなかったことを示している。

次にあげられるのが、『山形市史』通史編である。『山形市史』中巻、近世編(山形市、一九七一年三月)の第一章は「最上氏治下の山形」であり、「第一節 最上義光の支配」「第二節 改易と転封」「第三節 武将の面目とその文化」から成っている。このなかでは第

『山形市史』上巻、原始・古代・中世編(山形市、一九七三年三月)では、「第四章 中世の村山盆地」の「第一節 室町時代と村山地方」のうち、「2 大名領国の展開と斯波氏」「3 館在家の構造と郷村制」「4 戦国争乱の進展と最上氏」が該当し、これも大部分が菅田慶恩氏の執筆である。『山形市史』上巻の記述は天正十八年(一五九〇)までであるが、中巻は天文十五年(一五四〇)の最上義光の誕生から始まっているため、両者には義光について記述が重なる部分がある。これは、中巻が上巻よりも先に出て、義光について天正十八年の小田原参陣や奥羽仕置からではなく、誕生から記述されたことに原因がある。

ともあれ、最上氏および最上義光に関する多くの文献のなかで、最も一般的で多くの人々の目に触れる文献が、『奥羽の驍将―最上義光―』(以下「義光」と略す)と『山形市史』(以下「市史」と略す)であったことは疑いなく、いずれも菅田慶恩氏の執筆になるものであった。したがって、『義光』と『市史』は後世に大きな影響を与えたが、その記述が妥当なものであるかについては問題がある。そこで、以下これを戦国時代を中心として検証していきたい。

§

永正十一年(一五二四)二月十五日、最上義定は長谷堂において伊達植宗の軍勢と戦い、大敗した。伊達軍は楯岡・長瀨・山辺式部・吉河兵部以下千余人を斬り、長谷堂城を抜き、小梁川親朝を駐留させた。この結果、翌永正十二年最上氏と伊達氏は和睦し、最上義定に伊達植宗の妹が嫁ぐことになる(伊達正統世次考)。菅田氏は「この戦で惣領制的性格の濃い最上武士団の脆弱性が暴露され、最上勢の足なみはまったくそろわなかった」と述べている(『義光』、『市史』上も同内容)。

この種宗による最上攻めは、伊達氏の家督継承後の最初の対外戦争とみられる。いわば、伊達氏において用意周到になされた作戦とみられ、最上側が大敗したことは事実であろうが、最上

氏の体質が古く、伊達氏が新しいという見方は一面的と言わざるをえない。

§

義光が十六歳のとき、義守・義光父子が高湯(蔵王温泉)に湯治に行き、鹿狩りをして眠りについたところ、近辺の盗賊数十人が来襲した。義光は近習の者たちの先頭に立って防戦し、二人に手傷を負わせ、一人と組み合っ

て刺し殺した。その武勇に義守は喜び、笹刀と称した家宝の名刀を授けたという(最上義光物語)。この真偽のほどは明らかではないが、よく知られたエピソードである。義光が十六歳といえは永祿四年(一五六二)にあたり、「最上義光物語」の作者は、義光が少年の頃から武勇に優れていたことを示したかったものであろう。しかし、菅田氏は「大名親子ともあろうものが野盗の襲撃をうけたとは、最上氏の権勢も疑わしいものである」「当時の最上氏は、まだ豪族の城を脱しない小大名で、近隣の大々名伊達氏の権勢の下に屏息し、辛うじて命脈を保っていた程度であったのであろう」と述べている(『義光』、『市史』上)。義守の伊達氏天文の乱における戦歴やその後の義光の活躍をみれば、このような評価が当たらないことは明白である。戦国大名に組織されていない野盗の存在は、戦国時代

には一般的であり、これをもって小大名と評価することは出来ない。ただし、最上氏側の警備体制に問題があったことは確かである。

§

最上義光は戦国大名最上氏を飛躍的に発展させた人物であるが、義光による領国の発展過程、つまり歴史的な経緯については問題がある。菅田氏は天童落城について「根本史料がないため、不明な点が多く、落城の年月にも二説ある。『奥羽永慶軍記』『最上義光事歴』は天正五年十月とし、『愛宕社記』『諸城興廢考』『伊達世家譜略記』は天正十二年十月としている。松尾姫が天正六年生まれと伝えられるところから、近時は天正十二年説が有力となった。しかし、天正十一年は、義光が白鳥氏や大江氏を滅ぼした年である。同年のうちに谷地・寒河江・天童の三面作戦を行って、一挙に成功したとは考えにくい。また天正九年には義光が最上郡に進出し、強力な庄内の武藤氏と激しく戦っている。義光の領土拡張の経過から考えると、遅くとも天正八年までに天童城は攻略され、村山郡の川東は(最上川以東)地域は、完全に義光の領国化したとみるべき」としている(『市史』中、『義光』もほぼ同じ)。さらに、「義光はいつ頃一族を掃討し、村山地方に領国制を確立し

たかは明確でないが、遅くとも天正八年までには、川東地域をほぼ平定したと推定される」とされ(『市史』上)。推定とはいえ、天童落城を天正八年(一五八〇)と確定している。

§

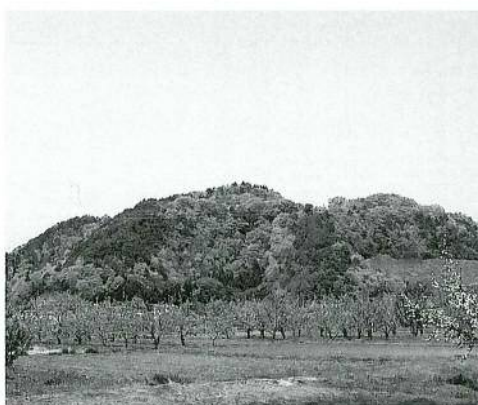
しかし、その根拠は、義光が天正九年には最上郡に進出していること、天正十二年のうちに、谷地の白鳥氏、寒河江の大江氏とともに天童氏を滅亡させたとは考えにくいというものであり、状況証拠にもとづくものであつて、確たる証拠があるわけではない。

つまり、旧説のほうが正しいといえよう。天童落城の過程は次のようになる。天正五年義光は天童城を攻撃したが決着を見ず、和睦が成立し、その際、天童頼貞の女が義光の側室となった。これは、一般的に和睦の形態としてみられるものである。天童頼貞はこのち死去し、その跡は若年の頼久が



最上義光公騎馬像

継いだ。義光の側室天童氏は、天正十年義光の三男義親を生むが、その直後の同十年十月十二日天童氏は死去した。ここに、婚姻関係を媒介とした最上・天童両者の関係は断絶した。そして、義光は次女の松尾姫(天正六年生まれと伝えられる)を延沢城主延沢満延の嫡子又五郎光満に嫁がせ、天童氏の同盟者のなかでも最も有力な国人の切り崩しに成功した。このようななかで、天正十一年九月義光は天童城を攻撃し、十月十日これを攻略したのである。近年、天童落城とその後の



天童古城跡

天童頼久の動向を示す史料が発見されており、現在では天童落城は天正十二年で確定している。

§

そして、菅田氏による義光の人物像については、末娘の駒姫の悲劇と長男

義康の死、そして最終的な最上氏の改易という事実とともに、積極的評価はされていないと思われる。これが地元の人々に与えた影響は大きい。そして、これが全国的な広がりをみせ、一例を示せば、「秀吉の勢力が天下を支配したところ、その威を借りた義光のずるがしこいやりかたは、まさに虎の威を借る『最上のきつね』とでもいふべきであろう」などという記述もみられることになった(佐々木銀弥著、日本の歴史文庫⑨「戦国の武将」講談社、一九七五年五月)。このような評価の見直しが必要なことは言うまでもない。

栗野俊之

(あわの・としゆき)

一九五六年 山形県山形市に生まれる
一九七九年 駒沢大学文学部歴史学科卒業
一九八九年 駒沢大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学
現 在 駒沢大学講師(非常勤)

【主要論文】

「戦国期における大宝寺氏権力の性格―上杉氏・土佐氏との関係を中心として―」(『山形史学研究』二九号、一九八三年)
「戦国期における合戦と和与」(『中世東国史研究会編『中世東国史の研究』東京大学出版会、一九八八年)

【著書】

「織豊政権と東国大名」(吉川弘文館、二〇〇一年)

特集

慶長出羽合戦四〇〇年

慶長出羽合戦四〇〇年記念の
年にあたって

財団法人最上義光歴史館
理事長 相田良一

天下分け目の関ヶ原、この合戦は全
国の主なる大名が徳川家康率いる東軍
と石田三成を中心とする西軍に分か
れて戦います。

時を同じく、ここ山形でも東北の関
ヶ原と呼ばれる激しい戦があります。
徳川方の最上・伊達、石田方の上杉が
戦った慶長出羽合戦、通称長谷堂合
戦です。この戦が、主戦である関ヶ原
合戦の帰趨に関係した重要な戦であ
ったことは、戦後義光公がその功績を
認められて五七万石の大大名となつた
ことからもうかがい知れます。

昨年は、この合戦から四〇〇年の記
念の年にあたり、当歴史館でもさまざ
まな記念事業を開催いたしました。

義光公の居城山形城が桜で彩られ
る四月から五月には、記念特別企画
展「武の心・よみがえる鐵の美」を開
催し、北海道・東北地区で活躍される
現代刀匠の先生方の作品と当館に譲
与された赤羽刀を公開しました。「花
は桜木、人は武士」花は桜が最も美し

く、武士は最も高潔であることを表
わした言葉です。武士の魂といわれ
る日本刀をご紹介することによつて、
記念の年に華を添えさせていただき
ました。

関ヶ原合戦と慶長出羽合戦が行わ
れた九月から十月には、市民を中心と
した多彩な事業が実施され、記念の年
を盛り上げました。長谷堂開戦の日に
は主戦場となつた長谷堂本沢地区の方々
の企画による「最上・上杉和敬の儀」が
華やかに開催され、四〇〇年の時をこ
えて山形・米沢両市の友好の絆を更に
深め、両市の益々の発展を確認し合
いました。誠に意義深いことです。

当歴史館では「東北の関ヶ原慶長
出羽合戦」と題して、最上軍、上杉軍、
伊達軍に関係する資料を紹介する
展覧会を開催。この合戦に関係する
貴重な文書や古記録から当時の激戦
の様子が偲ばれ、武器や武具からは命
運を賭けて戦つた武士の心意気が感
じられました。また、市民団体と合同
で開催した歴史講演会では、講師に鈴
木和吉先生をお招きし、市民の方々
とともに合戦の模様を振り返りながら
義光公の偉大な足跡を辿りました。
その他に、年間を通して歴史講座、

こども講座、写真コンテスト等、記念の
年に相応しいテーマで事業を開催いた
しました。

四〇〇年前に郷士を舞台に繰り広
げられた合戦に思いを馳せ、その意義
を改めて見直す機会を得られました
ことを市民の皆様方とともに喜びた
と思います。

「山形城主最上義光の出自と
出羽合戦出陣本陣の仕様」

清和源氏同族会
仙台藩志会
引地功侃

山形城主最上氏は、人皇第五十六
代清和天皇を始祖とし、源氏、足利氏、
斯波氏、中野氏と血筋を繋ぐ正統な
清和源氏の家系。公式には源姓を名
乗り、清和天皇を初代として己の代数
と通称氏姓を付記する。清和源氏の
血を引く者は、その高貴な出自の由を
もつて征夷大將軍(頼朝、尊氏、家康は
源氏長者として幕府を開いた)鎮守府
將軍、国司、管領、探題など国政の中枢
に必然的に携わる特権階級。山形城
初代城主斯波兼頼は羽州探題(按察
使將軍)、父の斯波家兼は北東北全域
の政治軍事の長たる奥州管領。従つて
あの戦国時代、下剋上の波に乗つて出



筋輪覆金周八十三

自不詳の無名の士が、「国城の主とな
り江戸幕府の根幹を担つた数多くの「新
規参入せる諸公」とは「線」を画す。出
羽合戦(長谷堂合戦)に出陣した清和
源氏第二十九代最上氏源義光(山形
城第十二代城主最上義光)の本陣仕
様は、足利氏の流儀に従つた白布幕に
太黒横「引き、これに清和源氏必携の
守りの神紋「左三つ巴」を配して邪氣
を追い払い、本陣内を神聖化する。宇
佐八幡宮、石清水八幡宮由来の清和
源氏の守護神「八幡大菩薩」の白長旗
を御神旗として掲げ、神(応神天皇)の
御加護を願う。山形城第二代城主斯
波直家が、天皇より賜わつた二つの勅
許御紋「十六弁八重菊(天皇菊)と五
七桐」の御紋を金糸刺繍を施した錦
の御長旗を掲げ、当主義光の權威並び
に、この戦は正当な聖戦であることを
天下に誇示する。遠方の敵味方から「総
大将義光ここにあり」と明示する二つ
の大馬印。一つは「朱色地に金色軍配団
扇」。もう一つは「黒地に金色五輪塔」。
本陣に立ち風に旗めく二つの大馬印は、
味方の士気を鼓舞し、戦闘意欲を掻

き立てる。本陣内の中央には総大将義光が床几に腰を据え、隣に副将の嫡男義康。左右に武将達が陣取る。義光の出で立ちちは、高貴な血筋の者として、紫糸威の「最上胴」で身を包む。兜は大岡秀吉の命に従って上洛し、京都在住の折、勧修寺大納言家御当主より義光が直々に賜わった「丸竹に雀」紋を兜の鍬形台の中央に彫金新調した三十八間金覆輪筋兜。右手に采を握る。太刀は先祖伝来の天下無双の宝刀「鬼切丸」。この糸巻太刀を腰に佩き、「我が先祖、斯波兼頼以来二百四十五年守り抜いたこの領地。敵に踏み込まれてなるのもか。一步も引くな」と全軍に檄を飛ばし、その闘志は義光の全身に漲り、「族を守らんとする当主としての気魄は後光の如く発散していたと思う。

名将・名君最上義光

山形史跡学習会代表 鈴木和吉

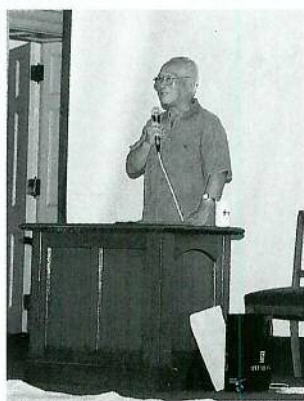
四百年前の慶長五年（一六〇〇）九月、最上領を奪取するために侵入してきた約三万の上杉軍に対し、最上軍は約八千。義光に勝ち目は露ほどもなかったのに、その指揮ぶりは実に緩急自在で「風林火山」そのもの、全く非のうちどころがなかった。然るに上杉軍を撃退した直後の手紙に「不思議の天道を以て勝利を得」と書いている。勝ったのが不思議だとい

意味で、謙虚といおうか、バカ正直といおうか、全くもって宣伝下手の山形人のルーツを見る思いがする。

思うに、義光の時代は義光の指導のもと、領内のすべての人たちが一体となつて、豊かな国造りのために懸命に努力を続け、活気に満ち溢れた山形の黄金時代を歴史に残した。

後（江戸時代初期）にでた「奥羽永慶軍記」（著書は現在の秋田県人）に「義光はその性寛柔にして無道に報いず。然も勇にして邪ならずまことに君君たれば臣臣とかや」とあり、「会津四家合考」（福島県）にも「一中を打ち従えて武勇は人に優れなかんづく慈悲深くして諸士を深くいたわり たとえば親の子を哀れむようにこそ一御心ざまも勇に才智も世に越え よろず慈悲深き大将にて」と最高の賛辞を惜しまなかった。

実際に義光は死の直前まで大規模な治水灌漑工事を精力的に押しすすめ、最上百万石の基礎を作ったのである。最上義光こそ、名君中の名君、日本が生んだ最高の名君なのである。



特別講話（9月15日）でのご講演

フランスの哲学者・歴史学者・小説家アナトール・フランスは言う。「知られなければ、歴史的事実とはなれ得ない」。当然過ぎる言葉である。われわれは、義光の人間像や業績について、余りにも知らなすぎるし、知ろうと努力もしていないように思えてならない。名将・名君最上義光に学ぶことが、山のようにあるのに。

「男は強くなければ生きてはゆけない 優しくなければ生きる資格がない 最上義光は強かった 優しすぎるほど優しくかった 見事すぎるほど見事に生きた」

鈴木和吉

長谷堂合戦四百年祭

出羽の関ヶ原四〇〇年祭実行委員会 事務局長 伊藤繁雄

新世紀を迎えておめでとうございませう。二千年は長谷堂を舞台に記念祭を実行するに当たって、行政並びに各機関のご協賛に厚くお禮を申し上げます。出羽の関ヶ原と語られる長谷堂合戦で戦った三人の殿様は、いづれも領民を大切に繁栄の執政を成した名君でした。時は過ぎて四百年の今では、行政、物流ともなんの支障もないが、歴史の中で米沢は、改易を免れたもの、蟠りを感じておったでしょう。世紀末と四百年の節目に合戦場となった長谷堂から「和敬の儀」を発信し、

十月十五日実行と決め、内容については多くの方から英智を戴きました。懸案であった二つの塚を復元し鎮魂祭に上杉砲術隊、森重流砲術を招聘して禮砲を捧げる為の許可願については期日ぎりぎり認可となり計画通りに進めることが出来ました。前日から大勢の人の協力で担ぎあげた太鼓や用具を、若衆連が篝火を焚き徹夜の番でした。当日は広い範囲に展開されるので天候が心配であったが晴天となり、「決行」の煙火をあげる、轟音三発、朝の空気を震わせて響き渡り、早々に人の列は忽ち頂上を埋めた。厳かに讀経とホラ貝、次々に勇壮な城山太鼓、続いて上杉砲術隊十四名の鎮魂の禮砲、物凄い轟音に皆叫喚し尻込をした。此の合図で二つの塚で「ゆかり人」にて除幕されて懇ろに回向をされた。巡拝し全員集結した学校のグラウンドで森



和敬式（10月15日）

重流砲術隊の演武、轟音と硝煙に包まれ一段と盛りあがった。式場ステージには「祝和敬の儀」と大書の横額、最上上杉の陣幕を張り、ぐるりと旗を立て、すばらしい雰囲気でした。烏帽子直垂に正装した知事代理は壇中央に、同じく正装の山形市助役と米沢市長は右左に着席し、壇下に「ゆかり」の方が掛け並ばれました。最上四十七代と上杉十七代のメッセージがゆかり人にて代讀され、両当主とも二十世紀は強い友好の絆で発展を念願される厚い要旨でした。双方から姫様役が祝酒をつぎ廻り、仲立役の知事が声高らかに「和敬の儀」を宣告されて満堂の大喝采。四百年の時空を越えてゆかり人が相集いて挙げた式典は示唆に富んだすばらしい記念祭だったと賞賛されて段落したのです。ありがとうございました。

「サバイバルウォーキング」に参加して

結城美雪

真夏日の続いた午後、雷鳴とともに激しい雨が暫くあたりを潤おした。一週間富士登頂したばかりで疲れも癒えぬ不安もあったが、「サバイバルウォーキング」に参加し、夜の十時荒砥城

址に集合したのである。

八乙女神社境内では幽玄な篝火が勢いよく焰を上げて燃えるのを見るときなぜか興奮を覚えるのであった。

神主の祈願とお払いも終え、上杉軍の攻め方や、忍者の再現を見たりして午前零時、法螺貝が夜のしじまに鳴り響くといよいよ緊張した。

「四百年の時空をこえて現在に生きる」出羽の関ヶ原四百年記念戦国サバイバルウォーキングがここに開始されたのです。

私は四百年前の上杉軍の一兵士を憶い、どんな気持ちで出陣したのだろうか、当時の戦国時代を浮かべながら、暗い山道を探検隊の如くヘッドライトを頼り黙々と歩き始めた。

一気に歩く事五km、ようやく中学校の休憩所だ。汗をふき靴を脱



いでしばし足のほてりを醒ました

出発。休息を利用して、片桐繁雄先生に折々の合戦のお話や、史蹟のことをお聞きすると、ますます目が冴えて、夜道を歩くのも苦にならず楽しみに変った。

途中、馬牽原展望所は道中も広く全員腰を下ろして休む。ふと空を見上げた。スバル座が手に取るように輝いている。天の川もロマンを秘めて流れるようだ。昔から変らぬこの星空を命がけの出陣を前に兵士たちは、どんな気持ちで仰いだろうか。丑三つ刻の「楔待部落」は物音一つなく静まり返っていた。

又登り坂の暗い山道を畑谷へと向かう。激戦地の畑谷城址が朝霞に浮かんで見えたのが印象的であった。足を摩りながら朝食をとる。

これからは下り坂となるが気合を入れ直す。夜通しで歩いた三〇kmは私の大きな足跡だ。

合戦四百年に遭遇した事に依って、語り継がれた歴史をより深く知る事が出来た。
(百目鬼・主婦)

「四百年祭に参加して」

本沢小学校六年 須藤太嗣

四百年祭の朝は、とても寒かった。



城山の頂上で、たき火にあたりながら、とうとうこの日がきたと思った。ぼくたち、「長谷堂城山太鼓の会」はこの日のために、四年前から練習してきた。その成果を発揮する時が来た。ぼくは、とても緊張していたが、精一杯がんばったところと思った。

演奏している時は、失敗しないように気をつけた。力一杯たたき終わった時、成功したと思った。とても満足のいく出来だったと思う。

四百年前、ここで大きな戦があった。たくさんの人たちが命を落したと思う。しかし、それから四百年後の今、本沢は、平和なところだ。いつまでもこの地区が平和であってほしいと思う。



和敬式(10月15日)



映像講談「慶長出羽合戦」(9月15日)

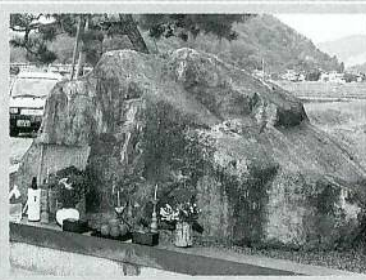


上杉鉄砲隊による礼砲(10月15日)

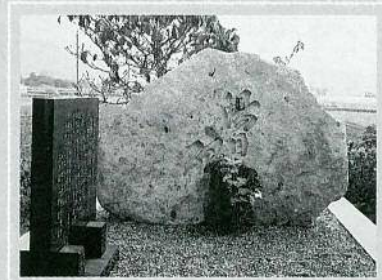
最上・上杉・伊達三軍の慰霊塚



掃部塚(最上軍)



主水塚(上杉軍)



湯目塚(伊達軍)

慶長出羽合戦400年関連イベント

- ◆ 4月29日～5月28日
 - 記念特別企画展「武の心・よみがえる鐵の美」
北海道・東北地区現代刀匠展
主催：財団法人最上義光歴史館
- ◆ 7月6日・13日・20日
 - 歴史講座「長谷堂合戦400年記念講座」
6日 「関ヶ原合戦と長谷堂合戦」 講師：渡邊信三先生
13日 「山形合戦の全容」 講師：鈴木和吉先生
20日 「合戦にまつわる武装」 講師：布施幸一先生
主催：財団法人最上義光歴史館
- ◆ 7月28日
 - 記念子ども講座 関ヶ原合戦の山形版「長谷堂合戦から400年」～最上義光の作戦はかに行われたか～
主催：財団法人最上義光歴史館
- ◆ 8月5日・6日
 - 戦国サバイバルウォーク
(1)戦国サバイバルコース 荒砥↓畑谷↓長谷堂(30km)
(2)歴史探訪ウォーキングコース 長谷堂合戦ゆかりの地(5～8km)
主催：出羽の関ヶ原400年祭実行委員会
- ◆ 9月15日
 - 記念歴史講演会
(1)映像講談「慶長出羽合戦」
語り部：石川精一氏 解説：片桐繁雄氏
主催：出羽の関ヶ原400年祭実行委員会
(2)特別講話「黄金の山形・最上義光」
講師：鈴木和吉先生
主催：財団法人最上義光歴史館
- ◆ 9月15日～10月22日
 - 記念特別展「東北の関ヶ原・慶長出羽合戦」
- ◆ 10月15日
 - 最上・上杉和敬の儀
(1)上杉鉄砲隊・森重流鉄砲隊による火縄銃実演
(2)長谷堂城山太鼓の演奏
(3)戦没者合同慰霊祭 掃部塚(最上軍)、主水塚(上杉軍)、湯目塚(伊達軍)
(4)和敬式
主催：出羽の関ヶ原400年祭実行委員会
- ◆ 11月18日～26日
 - 夏休み自由研究 関ヶ原合戦の山形版「長谷堂合戦から400年」展
主催：財団法人最上義光歴史館
- ◆ 2月3日～25日(展示公開)
 - 記念写真コンテスト「最上時代の面影を探る」
主催：財団法人最上義光歴史館

「羽源記」に見る 天文現象について

山形天文同好会事務局 鈴木静児

◆「羽源記」に義光誕生(天文十五年)のときの事として次のような記事がある。「出生の日より山王権現の宮の上に白幡虚空より降り、照空を七日ありしとか」

さて、これはどんな現象だったのか？考えられるのは、表現から見て天文か気象の現象であろう。

1.天文現象で特別なものと言えはまず日食月食が思いつく。日食は前年五月一日にあったが、天文十五年には無かった。また、月食は同年四月十六日の記録はある。しかし、この月食は事実あったかどうか疑わしい。いずれにしても「照空を七日」には適合しないだろう。

2.「照空を七日」という表現に、最も妥当と思われるのは彗星出現であろう。彗星の尾が夜空に伸びているものは雲のように見えることから、伊達貞山公治家記録では、元和二年の彗星に「俗呼テ旗雲ト称ス」と書いている。「幡」は、意味も読みも「旗」と同じになるから、「白幡」が彗星を指すことは考えられる。し

かし、天文十五年の彗星出現記録は「日本天文学史」にはなく、彗星のカタログ、「彗星を追う・広瀬古川香西共著」にも無い。

3.他の現象

古文書によく記録されている現象としては、他に月星接近・惑星現象・流星などがあるが、天文十五年前後五年間を見ても特別なものは見つからなかった。

天文というより気象現象で思いつくのは、オーロラである。米沢藩家老荻戸善政の「三重年表」で寛永十二年七月に「二十六日夜紅氣満天」とあるのがオーロラであり、他にも、享保十五年「上山三家見聞日記・上市市史」、明治七年「大町念佛講帳・河北町誌」等々多くの記録がある。しかし、これも天文十五年の記録というものは「日本天文学史」他にも見つからない。しかし、記録が無くても、そういう現象がなかったとは言えない訳だから厄介である。

結局、「白幡」は説明できないままである。



筆者撮影・ヘールポップ彗星(1997.3.9 宮城県山元町)

◆「羽源記」にはまた、慶長十三年の事として、次のような記録もある。

「葉山、鳥海山といふ両峯より、光物毎夜星の如くに続いて月山の腰に見え、立石寺燈明堂の上迄布引いて光渡る、紫雲空中に充滿せり」

「紫雲」は別にして、これは何だろうか。「星の如く」というから、恒星惑星ではないだろう。「毎夜布引いて」見えるのは彗星・流星群というところか。現象の日時が不明なので、調べるのに困るが、慶長十三年の光り物として、江戸京都では三月二十九日・四月二十三日・七月十

四日・十月三日の記録があり、いずれも、流星と見られる。流星群ならば、何日かに亘って同じ方角から出現することはあるのだが、群れらしきものの記録は見つからなかった。

彗星では、同年五月二十一日に「客星東南に出現、月光の如し」、しかも数日にわたって毎夜見えた、との記録はある。しかし、この客星については残念ながら他に記録がなく、多分木星だろうと言われている。また、同年四月十三日の「今夜旗雲出現」との記録は、彗星ではなく雲のことらしい。慶長十二年ならば、六月から九月までハレー彗星が毎夜現われ、明るいときは光度一等級だったらしく、国内記録も数多いのだが。

◆話は変わるが、大國富丸氏(南陽市在住)は、自分で発見した小惑星に「義光」「兼統」と命名し国際天文学連合に登録・承認された。去年は義光と兼統が仲直りをした行事もあったし、戦火を交えた二人の武将が、今では仲良く天空に輝くというのはいい話である。ただ、小惑星は大変暗い天体で、肉眼で見えないのが少々残念である。

光明寺残照

武田恭子

山形市の開祖斯波兼頼の菩提所が、七日町の光明寺にあります。光禪寺や専称寺は知っていても光明寺は知らないという人が多いのは光明寺の檀徒としていささか寂しい気がします。斯波兼頼が応安六年（一二七三）漆山の念佛堂で布教中の元愚上人に帰依し、永和元年（一二七五）家督を直家に譲つて出家し、城外に草庵を結び念佛三昧の生活にはいられたのが、光明寺の始まりとされています。

時が流れ兼頼より十一代目義光が二の丸内にあった光明寺を現在の美術館前に再興し、文禄二年（一五九四）に寺領一七六〇石を寄進し出羽時宗の触頭として最大の寺領と支配力を持つ最上道場として世に知られたのです。

寺領一七六〇石は徳川幕府によって

公認され、朱印状が下附され、最上家の改易後も幕末まで続き、後に鳥居忠政が七日町五丁目の現在地に移されました。正保四年（一六四七）最上家の旧臣其阿上人が、二十一世住職となり、寺地八千坪、参道、山門三つ、左右に末寺、熊野神社、番小屋、馬小屋、米蔵。土蔵には数多く宝物があり、中でも宗祖一遍上人絵巻十巻は重要文化財となっています。

周囲には寺侍三十二人の屋敷がありました。明治になり、ご朱印地の奉還、明治二十七年の大火にあい、昔の面影を残すのは「当山開基光明寺殿兼頼公」の墓碑のみとなりました。昭和三年兼頼公の五百五十年忌に

は、山形の誇りとして全市あげて盛大なお祭りをしたときいています。山形市長をはじめ有力諸団体が一致して、「奉頌歌」をつくり、これを六千人の児童が歌いながら旗行列をしたことが新聞に掲載されました。又旧山形商業学校初代校長渡辺徳太郎先生は、毎年七月八日兼頼公の祥月命日には全校生徒を引率して光明寺に墓参りに来たそうです。

開山以来六百有余年の歴史と伝統を誇る光明寺ですが、焼跡に仮本堂を建立はしたものの、寺侍三十二人の檀徒では荒廃あるのみでしたが、徐々に檀徒の数も増し、愛山護法の深念で昭和四十年に位牌堂建立を皮切りに、昭和五十年には開山六百年記念事業として本堂を修復し、寺の護持教化、助成の目的で奉賛会を発足させ、荒れ果てた境内等の整備に着手しました。

その後も客殿、庫裡、又平成五年に現本堂建立百周年記念事業として本堂の増改築を重ね、ようやく光明寺としての体面を保てるようになりました。光明寺の事業として時宗總本山遊行寺の団参は、もとより、県内及び近県に点在する時宗の寺を巡拝し、住職さん、時には總代さんまで出て寺の由来など勉強させて頂きました。昭和六十三年には宗祖一遍上人の七百年ご遠忌にちなんで、岩手県にある一遍上人の祖父河野通信公の聖塚に参り、雑木林の中、当時と殆ど変わらないのではないかと思われ

る静寂の中に墓標が私達を迎えてくれました。住職にならって皆で法要し祈りを馳せました。

平成十年度は光明寺總代の二本松博子さんの先祖、畠山家の菩提寺、二本松市の称念寺に参り、法要を営み、裏山の畠山家累代の墓と栗の巣の戦いで戦死した家臣二十三名が祀られている墓を詣りました。霧ヶ城、栗の巣、古戦場の記念碑、戊辰の役で戦死した二本松少年隊の眠る大隣寺を郷土史の先生に案内して頂き昔日の佛を偲び、石垣のほつりを散策して来ました。

戦後荒廃した光明寺ですが「光明寺をきれいにする会」の誕生により檀徒一人一人の意識が改革され、平成の現代に、ようやく蘇った感じが致します。

これまでの並々ならぬ御苦労に思いを馳せ、四季折々の花咲き香る、安らぎの光明寺にしたいと念じ、精進したいと思えます。（八日町・主婦）

霞城址の春

山形県俳人協会幹事長
「波」同人「阿以」代表

庄司りつこ

月あげて花もおぼろの大手門
忽然と行手に鳴や花筏
倒影のさくらに桜散りつづも
鴨たりに満々と水温みけり
傷ふかき幹に春禽あそびをり



光明寺全景

平成12年度
事業スナップ



特別企画展

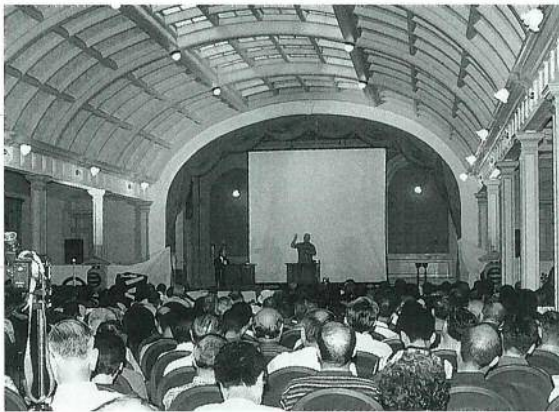
武の心・よみがえる鐵の美
～北海道・東北地区現代刀匠展～



刀剣鍛練の実演



銘切りの実演



特別講話(9月15日於文翔館講堂ホール)

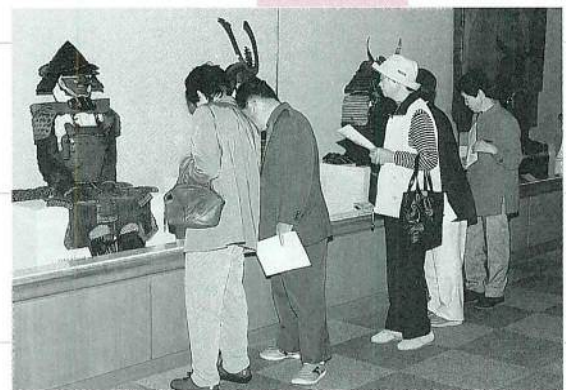


特別展

東北の関ヶ原
慶長出羽合戦



写真コンテスト受賞式





第2回歴史講座 布施幸一先生(2月23日)



第1回古文書講座 後藤禮三先生



こども講座「少年少女やまがたの歴史探険隊」



第2回古文書講座 梅津和夫先生



歴史講座「やまがたの史跡めぐり」

平成12年度事業

- ◆ 4月29日～5月28日
 - 特別企画展「武の心・よみがえる鐵の美」
 - ↳ 北海道・東北地区現代刀匠展
 - ↳ 展示総数25口
 - 特別公開「赤羽刀」6口
- ◆ 7月6日・13日・20日
 - 第1回歴史講座「長谷堂合戦四〇〇年記念講座」
 - 6日 「関ヶ原合戦と長谷堂合戦」 講師・渡邊信三先生
 - 13日 「山形合戦の全容」 講師・鈴木和吉先生
 - 20日 「合戦にまつわる武装」 講師・布施幸一先生
- ◆ 7月28日
 - こども講座 関ヶ原合戦の山形版「長谷堂合戦から四〇〇年」
 - ↳ 最上義光の作戦はいかに行われたか
 - 山形城↓長谷堂城↓成沢城
- ◆ 9月15日
 - 歴史講演会
 - 特別講話「黄金の山形・最上義光」
 - 講師・鈴木和吉先生
- ◆ 9月15日～10月22日
 - 特別展「東北の関ヶ原・慶長出羽合戦」
 - ↳ 展示総数41点(うち指定文化財6点)
- ◆ 10月4日・11日・25日
 - 第1回古文書講座「古文書、古記録、古文獻に親しみ、最上義光とともに歴史の世界の悠々散歩」
 - 講師・後藤禮三先生
- ◆ 10月14日・28日・11月11日
 - こども講座「少年少女やまがたの歴史探険隊」
 - ↳ 城下町やまがたを探って歴史を発見しよう
 - 講師・板垣英夫先生 沖憲一先生
- ◆ 11月4日
 - 歴史講座「やまがたの史跡めぐり」最上義光公の史跡を訪ねて
 - 講師・渡邊信三先生
 - 中野城跡↓千手堂↓専称寺↓日枝神社↓宝光院
- ◆ 11月18日～26日
 - 夏休み自由研究 関ヶ原合戦の山形版「長谷堂合戦から四〇〇年」展
- ◆ 1月12日・19日・26日
 - 第2回古文書講座「江戸旅日記を読む」
 - 講師・梅津和夫先生
- ◆ 2月3日～25日(展示公開)
 - 第1回写真コンテスト「最上時代の面影を探る」
- ◆ 2月9日・16日・23日
 - 第2回歴史講座「やまがたの歴史三題」
 - 9日 「やまがたの古墳」 講師・茨木光裕先生
 - 16日 「最上家の人々を語る」 講師・片桐繁雄先生
 - 23日 「高山彦九郎とやまがた」 講師・布施幸一先生

研究余滴① 最上家親という人物

片桐繁雄

今年一月十日の山形新聞で、最上家親の京都参陣を証拠だてる史料の発見が報じられた。

慶長八年(一六〇三)卯月(四月)十一日付けで、家親から西村山地方の土豪、堀弥三郎にあてた書状である。所蔵者は朝日町の五十嵐義一氏、解読は鈴木勲氏。内容は「先年京都まで陣参してさまざま奉公してくれた恩賞として、居館の普請を許す」というものである。この年、家親は二十二歳。最上義光在世中は寒河江方面に領地を与えられ、「寒河江駿河守」を名乗っていた一時期があった。もちろん、実際に寒河江に住んでいたのではあるまい。

ところで、最上義光亡き後を嗣いだ家親については、一般にはあまりよく知られていない。それも無理のないことで、義光という大人物の光芒に幻惑されて周囲の者は見えにくいし、若いときから家康・秀忠に近侍して江戸住まいが多く、山形城主であった期間がわずか三年三ヶ月という短期間であったことも、知られにくい理由であろう。

だが、家親もなかなか華々しい存在だった。「家康」の名の一字をもらったこと、秀忠に従って信州上田攻めに参加したこと、さらに琉球王の案内役、朝廷から摂関家が江戸に来たときの披露役、大坂攻め(冬・夏の陣)での江戸城警護と、重要

な役目をこなしている。残された史料からは芸術文化のたしなみが豊かだったことも窺われ、大名最上家の貴公子といった観がある。

だが、家親については、むしろ最上家改易の遠因をなすとされるその最期が、話題となることが多い。

亡くなったのは元和三年(一六一七)三月六日。三十六歳。文献では「頓死」つまり「急死」と書かれている。「在府して芝居を見ているとき」と『徳川実記』にはある。一方徳川秀忠からは病氣見舞いの手紙ももらっている。こうした状況から推測するに、食中毒のようならかな病気で、江戸で亡くなったのであろう。

後継ぎの家信はまだ十二歳という幼さ、一族重臣の間でこたごたごたが起ってしまう。要するに、政権をめぐる抗争である。そういうもめ事には、揣摩憶測がつきもので、家親は政敵から毒殺されたのだと言いついた一族家老もいた。幕府で調べたところ、これは根拠なしと判定されているから、やはり死因は急病だったろうと思われる。

世間は、名門の崩壊には、とかくよからぬ噂をたてたがる。女に殺されたとか、狩りの帰りに毒を盛られたとか、噂に尾鱈がついて勝手に話が広がり、妙な方向に発展し、それが真しやかに語られることにもなる。

従四位下侍兼駿河守、最上家親。若くして逝った山形城主を、もう一度見なおしたいものだ。

第1回

写真コンテスト

「最上時代の面影を探る」

最優秀

長谷堂合戦の面影(3枚組)
山形市 結城真日氏



【ご協力のお願】

最上家にかかわる資料等をお持ちの方、ご存じの方、ご一報ください。

※最上時代の歴史や文化を明らかにするための資料を探しております。今後の研究のために役立たいと思います。よろしくご協力ください。

【ご利用のご案内】

開館時間 午前9時から午後4時30分
入館料 一般 大人300円 高校生200円
(小中学生100円・土曜日無料)
団体 大人240円 高校生160円
小・中学生80円
休館日 月曜日(国民の祝日となる場合はその翌日)
12月29日から1月3日
交通 JRR山形駅より徒歩約10分
大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図



平成13年3月発行
編集・発行 財団法人最上義光歴史館
〒990-0046
山形市大手町1-153
☎023-625-1710
☎023-625-17102

印刷 田宮印刷